

教育の窓

kyoiku no mado

沖縄の声を現場で聞く

沖縄戦の戦跡や米軍基地を訪ねてオキナワの声を聞く――。専修大学文学部でフィールドワーク型の集中講義「沖縄ジャーナリズム論」がスタートしてから、今年で10年目を迎えた。東京でもインターネットなどで沖縄に関する膨大な情報に触れることができる中、学生たちは直接見聞きする体験を通じて沖縄を見つめ、理解を深めている。

●イメージは一変

専修大学文学部には、報道機関などが協力して作る講座が七つあり、沖縄ジャーナリズム論もその一つ。2008年に始まり、人文ジャーナリズム学科の学生(約400人)のうち毎年20人が受講できる。事前に沖縄戦や米軍基地の移設問題、日米安全保障条約などテーマを決めて学習し、9月に約1週間、沖縄県を訪れる。費用は約5万円。東アジアの戦後と絡めて沖縄の現代史を学び、日本が抱える課題を浮き彫りにするのが狙いで「基地」「戦争」「メディア」の三つを主要テーマ

る。事前に沖縄戦や米軍基地の移設問題、日米安全保障条約などテーマを決めて学習し、9月に約1週間、沖縄県を訪れる。費用は約5万円。

東アジアの戦後と絡めて沖縄の現代史を学び、日本が抱える課題を浮き彫りにするのが狙いで「基地」「戦争」「メディア」の三つを主要テーマ

る。事前に沖縄戦や米軍基地の移設問題、日米安全保障条約などテーマを決めて学習し、9月に約1週間、沖縄県を訪れる。費用は約5万円。

東アジアの戦後と絡めて沖縄の現代史を学び、日本が抱える課題を浮き彫りにするのが狙いで「基地」「戦争」「メディア」の三つを主要テーマ

る。事前に沖縄戦や米軍基地の移設問題、日米安全保障条約などテーマを決めて学習し、9月に約1週間、沖縄県を訪れる。費用は約5万円。

東アジアの戦後と絡めて沖縄の現代史を学び、日本が抱える課題を浮き彫りにするのが狙いで「基地」「戦争」「メディア」の三つを主要テーマ



沖縄県名護市辺野古のキャンプ・シユロフのフェンス前で現地コーディネーターの話を聞く学生たち。山田健太教授提供

専修大集中講義10年目

に据えている。

この講義で最も大切にしていくのは「現場主義」だ。沖縄戦の戦跡を巡って語り部から話を聞いたたり、米軍普天間飛行場(名護市辺野古)の移設先とされる名護市辺野古を視察して反対する住民に会ったりする。普天間飛行場も訪ねて司令官に話を聞き、海兵隊員と昼食を共にすることもある。

●学生の思考を信頼

13年に参加した吉田汀子さん(24)は「フィールドワークが好きで沖縄に行ってみたら、1つと受講のきっかけを振り返る。それまで沖縄に行きた経験はなく、「青い海と青い空がきれいで、優しいおばあさんがいて。そんな漠然としたイメージを抱いていた。だが、イメージは一変した。本島南部の戦跡を巡り「琉球処分から、沖縄は長い間負の歴史を背負ってきたんだ」と思い知らされた。

●学生の思考を信頼

インタンでは、交流イベントを企画したり、地域の人を対象にした英語教室を運営したりするなど、基地について理解してもらおうと奔走する日本人の涉外官に出会った。沖縄の伝統芸能エイサーを習いたいという米兵もいた。「基地と地域との草の根的な交流は想像以上で、米兵や基地を頭ごなしに否定する反対派の人たちの言葉に違和感

を持つこともあった」という。だが、本土に戻って沖縄の置かれた状況を客観的に見るのと、その言葉の奥にある感情にも思いが至るようになった。「慮けられてきた歴史を背負ってきた、怒りは臨界点に達していると思う」。沖縄と関わる仕事ができないか模索している。

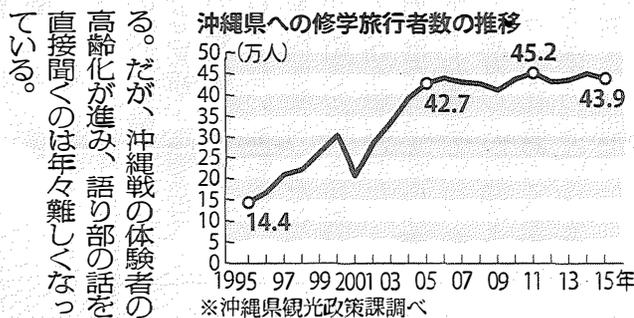
沖縄を取り巻く環境や情勢はこの10年で大きく変化した。講義がスタートした頃は、学生たちが辺野古の海で遊ぶこともあったが、今は違う。基地との境界にはフェンスやコンクリート塀ができて緊迫感が増す。担当する山田健太教授(言論法)は「沖縄が大きな政治課題になってから、東京にいる学生にとっても情報としては身近になった」と言う。だからこそ、当事者の話を聞き、それを整理する現場主義」がより重要になって

いると指摘する。基地反対派の人の話に共感する学生もいれば、「一つは行けない」と感じる学生もいる。宿泊先に帰って議論する中で「表面だけみて判断するのはいけない」と気づく学生も出てくる。山田教授は「考えを押しつけても意味がない。学生の素直な思考を信頼して見守るしかない」と話す。

受講者の約2割は新聞社や放送局などに就職する。14年に参加した沖縄県出身の大城志織さん(24)は沖縄タイムスの記者になり3年目。講義では、渡嘉敷島で沖縄戦を生き延びた人から今も続く苦しみを感じ、辺野古で普天間移設に抗議する人からは行動することの大切さを学んだという。「自分が現場へ行き、直接話を聞くことで真実に近づける」。そう信じて取材を続けている。

修学旅行で一番人気

沖縄県は高校の修学旅行先で一番人気がある。県観光政策課の調査によると、沖縄を修学旅行で訪れた児童・生徒は、2005年に初めて40万人を突破し、最近の10年は40万〜45万人で推移している。東日本大震災が起きた11年は、東北地方などを旅行先にしていた学校が振り替えた影響で、過去最高の45万1550人を記録した。15年は2473校の43万8854人が訪れた。内訳は高校が67・9%、中学が30・3%を占める。沖縄へ修学旅行をする学校の約4割を扱う大手旅行会社JTBによると、公立高校の修学旅行で航空機の利用が広まった1990年代から、沖縄を選ぶ学校が増加した。東京、神奈川、千葉の3都県にある公立高校の半数以上が沖縄に行くと



代わるプログラムとして、沖縄の大学生と沖縄の歴史や基地問題などについて討論する場を設ける学校もある。マリンスポーツなどの体験学習は依然として人気で、近年は農家や漁家に泊まって生活体験をさせる学校も増えている。JTBの担当者は「沖縄の人気は今後も変わらないうだろう。観光だけでなく、現地の人と会って話を聞いたり、体験したりする学習を重んじる傾向が強まっている」と話している。

【金秀蓮】